寓話「ナナカマド村」

20240501

目次

1 章　カエデとハガネ 1
2 章　ヒビキ 4

1章　カエデとハガネ

1、ナパン

あるところに「ナパン」と呼ばれる現代日本に似た世界がありました。
大きな違いは、ジャパンは知識教育ですが、ナパンは実践教育な点です。
知ってるよりできる方がよい。
ただできるより責任を引き受けてやり続ける方が偉い。
誰でもできる易しいことでも、飽きずに周りの為、自分の為に、やり続けることはすごい！
そんな世界。

2、カエデ

ナパンの山奥、ナナカマド村に、カエデという女の子がいました。
名前の通り紅葉したカエデ色の髪をおかっぱに揃えています。
小柄でコロコロしている割りに力持ちで、自分より大きいものを運べます。
遠くから見ると荷物が動いているようです。

3、オモト

カエデのお母さんはオモトです。
料理が得意です。特にかまどで炊くめしは村で１番と言われています。
カエデはお母さんのご飯が大好きなので、自分でも炊けるようになりたいと思いました。
ナパンでは、７歳になるとスマホをくれます。そして金を稼ぐことができます。電子マネーをもらえるからです。
カエデはお母さんと同じ給食係になりました。

4、ハガネ

カエデはお母さんに習ったことを守らないで、自分なりに工夫しました。
お米が焦げたら次は水を多くして粥になる。
粥になったら、早めに火を落として芯が残る。
やればやるほど悪くなって、とうとう 1 つ年下のハガネ少年が怒りました。
そしてすべて数値でコントロールする科学的なやり方を教えてもらいました。

5、お母さんの味

米も水もワラも時間もはかって、失敗はなくなったけど、お母さんの味ではありません。
ハガネにお母さんの味の出し方を聞いたら、交換条件として荷物持ちを頼まれました。
力持ちのカエデは喜んで引き受けました。

6、採集

水と食料と道具を積んだ背負子を担いでカエデはハガネの後ろを歩きました。
身軽になったハガネは、草や花、石に枝、虫などを捕まえていきます。
お昼ご飯になり、おにぎりを二人で食べました。
そして将来の話をします。
カエデは言いました。
「13 から 15 歳の工場勤めを終えたら、1 年くらい街に住んで美味しいものが食べたい。その後はお母さんの味を年下の子どもに教えて、60 歳で引退しても食べられるようにする」
ハガネは答えました。
「単純な夢だな。その分、やりきれば強い」
「うん！　ハガネは？」
少し考えてから、ハガネが答えました。
「世界中で採集してみたい。それで 39 歳になったら、ナナカマド村に戻るよ」
「いい夢だね！」
「だろ？」
二人はその通りの人生を送りました。

2章　ヒビキ

1、ヒビキ

　ヒビキは、カエデやハガネと同じナナカマド村の子どもです。
　歌が好きで、いつも踊りながら歌っていました。
　もっとうまくなりたい。
　世界一の歌姫になりたい。
　夢は広がります。努力も惜しみません。
　そしてとうとうナパンで1番有名な歌手になりました。

2、歪んだ願い

　60過ぎて引退したカエデとハガネは、ナナカマド村で仲良く暮らしています。
　そこへ同じく年老いたヒビキが葬儀歌手として帰ってきました。
　世界一になった自分に比べて、何も持たないカエデは不幸に違いない。そうでなくちゃ嫌。
　そんな気持ちで久しぶりに村に帰りました。
　けれどカエデは誰が見ても幸せそうです。自分の子どもだけでなく、炊き方を教えた子どもたちに慕われ、満足そうに笑っています。

3、ヒビキとカエデ

　ヒビキは、カエデの胸をポカポカ叩いて文句を言いました。
「何も持たないくせに、挑戦しなかったくせに、どうして幸せなのよ！」
　カエデはポカンとしています。
「えーと、毎日、お母さんのめしの味が食べられるから？」
「そんなことで幸せなの？　　そんなことで幸せでいいの？」
　ちょっとだけ都会にいたカエデには、競争社会で勝ち抜いたヒビキの苦労が分かる気がしました。

「ヒビキだって、新しいことに挑戦してみんなを楽しませてきたじゃない。みんなの笑顔が見られて幸せじゃないの？」
　いやいやをしながらヒビキが、座り込んでしまう。
「無理なの。新しいことはできないの。だからわたしにもう価値はない」
「そんなことない。まだ葬儀の歌が歌えるじゃない。同じことで喜んでもらえるよ。そう思って来てくれたんでしょ？」
　カエデがしゃがんでヒビキを抱き締める。
　うん、うん。
　うなずくヒビキは、そう言ってくれると期待していたことに気づく。
　やりぬいたカエデに、やりぬいた自分を認めて欲しかったのだと思い知る。

3、さよなら

　世界一のヒビキの歌は素晴らしかった。
　誰もが、亡くなった人々の思い出にひたる。
　ヒビキは言った。
「さよならカエデ。わたしは外国に行く。まだ挑戦をやめない」
「性格は死ぬまで変わらないもの。わたしは同じことで、ヒビキは新しいことで、みんなを楽しませる。今を精一杯生きよう」
　二人は握手をして別れた。

寓話「ナナカマド村」20240501

著　　ELYE

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社